

いりえわん いま 入江湾、今むかし



川満亀吉と人頭税廃止運動

明治の頃、嘉手苅集落に川満亀吉という人がいました。幼い頃から才能に長け、家のことや弟妹の面倒もよく見るしっかり者だと村中から評判を集め、23歳という若さにして嘉手苅村の総代に抜擢されました。当時の宮古は、人頭税に苦しめられ、身分の差が激しく、農民は税を納めるために、寝る間も惜しんで働くような時代でした。

そんな中、亀吉は沖縄から黒糖づくりを広める目的で来た製糖技師の友人の紹介で、真珠養殖のために新潟から来ていた中村十作と出会います。島の現状を知った十作は、東京の事情に詳しく、人脈もあることから東京の案内役を買って出ます。こうして作戦を固めた一行は、請願のために東京へ出発しました。東京へは十作と正安、農民代表として西里蒲と平良真牛が赴き、亀吉は島で留守番役を担いました。

4人が請願に向かったことを知った役人たちは、正安が農民をたぶらかして税を減らそうとしていると、あの手この手で邪魔をしてきました。しかし留守番役の亀吉を中心とした総代たちは、団結して住民たちの気持ちを鼓舞し続けました。

そんなふたりは日頃から人頭税の制度に疑問を持っており、日々、人頭税をなんとかできないかと悩んでいました。

そこで、深夜に遠くは伊良部島や池間島まで何度も出向き、各地の総代に人頭税廃止の協力をお願いしました。その甲斐あって人目を忍んで入江湾のパチャガ崎に27名の総代が集まり、日本政府に陳情することが満場一致で決議されました。

ちょうどその頃、正安の製糖技師の友人の紹介で、真珠養殖のために新潟から来ていた中村十作と出会います。島の現状を知った十作は、東京の事情に詳しく、人脈もあることから東京の案内役を買って出ます。こうして作戦を固めた一行は、請願のために東京へ出発しました。東京へは十作と正安、農民代表として西里蒲と平良真牛が赴き、亀吉は島で留守番役を担いました。

4人が請願に向かったことを知った役人たちは、正安が農民をたぶらかして税を減らそうとしていると、あの手この手で邪魔をしてきました。しかし留守番役の亀吉を中心とした総代たちは、団結して住民たちの気持ちを鼓舞し続けました。

その後、十作は何度も東京へ渡って陳情し、マスコミや政界の人々を巻き込んで、みごと帝国議会の可決を勝ち取り、1903年、266年に渡る悪税は幕を閉じました。

人頭税廃止には、多くの人の努力がありました。集落内に川満亀吉

称える顕彰碑が建てられ、当時秘密の会合を繰り返したとされるパチャガ崎、さらに城間正安の住居跡といわれる場所にも、人頭税廃止に因んだ記念碑を建立しました。

参考『川満亀吉と人頭税人頭税廃止運動百周年記念』(1993)川満家親族会

人頭税年表

1609(慶長14)	薩摩侵攻。琉球王府、薩摩の支配下に
1637(寛永14)	宮古・八重山で人頭税が始まる
1659(万治2)	年貢の総額を毎年一定額にする
1879(明治12)	廢藩置県に伴い琉球は沖縄県に
1884(明治17)	城間正安、製糖技師として那覇から宮古へ赴任
1892(明治25)	中村十作、真珠養殖事業で宮古へ
1893(明治26)	人頭税廃止請願のため、代表4人が上京
1895(明治28)	請願書が帝国議会で可決
1903(明治36)	人頭税廃止
1982(昭和57)	川満亀吉の顕彰碑建立

正字:通訳
十作:道案内&人脈
モラシ&カマ:農民代表
トナ&亀吉:する番役
誰か一人でも欠けたら
請願はなしはなかつた



川満亀吉顕彰碑



人頭税廃止運動ゆかりの地
城間正安住居跡



人頭税廃止運動ゆかりの地
パチャガ崎

じょう せき

クバカ城跡



入りえわんちか い ち
入江湾近くに位置するクバカ城跡は、敷地を囲む野面の石
づ のこ きちょうど し せき
積みが残される貴重な史跡です。『雍正旧記(1727)』には、
「長さ31間(56.4m)横25間(45.5m)、門は未方(南西)に向か
う」とあり、現存の石積みとほぼ一致します。また、城主は
クバカ按司と呼ばれる強力無双の人物
であったと伝えられます。城跡北側に
は久場川井泉があり、城外南側に按司
を祀ったクバカ御嶽があります。

あ づ
クバカ按司のおもしろ伝説
でんせつきょだい
巨大シャコガイ

クバカ按司の剛腕は大変有名で、遠く八重山まで知られていました。ある日、八重山の力自慢が宮古まで決闘にやってきました。按司は「暑いから水浴びをしよう」と誘い、大シャコ貝で水を汲み、豪快に浴びました。八重山の力自慢も真似てみましたが、シャコ貝を持ち上げることすらできず、とうとう決闘を諦めて帰っていました。

おお
大きな竹

ある時、嘉手丸と川満の按司がクバカ按司をおもむろに生えていた大きな竹を引き抜き、手で割いて便所へ持っていました。それでお尻を拭くというのです。川満の按司も負けじと竹を抜こうとしますが、結局抜くことはできませんでした。

ウブガムもち



クバカ按司と大変仲の良い喜佐真按司は、クバカ按司が粟とウブガム

(タカキビ)で作ったウブガムもちを食べているのを知り、「どんなにひもじくてもそんなまずいものは食べない」と言い切れます。そこでクバカ按司は喜佐真按司を魚釣りに誘い、昼食もとらずに釣りをしました。喜佐真按司はお腹が減ってまりませんが、クバカ按司は「ウブガムもちしかない」とひとり頬張ります。空腹に負けた喜佐真按司は、結局ウブガムもちを分けてもらい「美味しいなあ！」とつい口走ってしまいました。

うつく
美しいうんこ

ある日、喜佐真按司と「どっちが綺麗なうんこを出せるか」勝負をすることに。喜佐真按司は旨いものを食べれば良いうんこが出るはずとご馳走ばかり食べて過ごし、クバカ按司はサツマイモを食べてその日に備えました。いよいよ勝負の日。クバカ按司は美しい渦巻状のうんこでしたが、喜佐真按司はご馳走の食べ過ぎで下痢。「何をやってもあんたには勝てない」と笑って言いました。

参考:『宮古島記事』(1752)、『宮古お嶽集』(1980)、『下地町の文化財』(2000)

上野・野原コース



コース全長約4km
所要時間:徒歩1.5時間 車30分

- 徒歩コース
- 大嶽城跡 指定範囲
- - - 大嶽公園の植物群落 指定範囲
- サティパライの順路



うぶ たき じょう せき
大嶽城跡



大嶽城跡は14世紀中頃の城跡で、宮古島のほぼ中央に位置する野原岳の丘陵上にあります。『雍正旧記(1727)』には「城長58間(104.4m)、54間(97.2m)、門未の方(南西)に向かう」と記されています。戦後の米軍施設建設などを経て、残っていた石積みも現在はなくなっています。城跡周辺には、按司が掘ったとされるふたつの井戸や、按司の3人の息子を祀る御嶽が残されています。



農業神になった男 ピギタリ

大嶽村の城主である大嶽按司は、とても賢く武力に長け、農耕と牧畜を広め、村人からとても慕われていました。

按司には3人の息子があり、次男知呂按司と三男金丸按司は、父に似て文武に長けた若者でしたが、長男のピギタリは争いごとを嫌い、農業を好む性格でした。

ある日、父大嶽按司が突然世を去り、遺された城は息子たちに託されますが、ピギタリは城を出て農民として暮らしていくことにしました。

そんな折、当時島中を荒ら回っていた与那霸ばらの一団が、突然城を攻撃してきました。弟たちはすぐさま村人を野原嶽の山頂、カシフガーラに避難させ、父の遺した策に従い、次男は城の東の門を、三男は西の門を守りましたが、みな力尽きて殺されました。そしてカシフガーラに隠れていた住民も、夜に水を求め



て井戸にやってきた子どものあとをつけられ、みな殺しにされました。

そんな惨劇の中、ひとりだけ生き残った男がいました。男は山伝いに走り、昼は洞窟で眠り、夜に食を漁り、集落から東に2kmほど離れたウプアラス原に落ち着きました。

その後、大嶽村の惨事を哀れに思っていた隣の新里村の首長の助けもあって、男は首長の孫ミガマラと夫婦になって村立てをし、7男7女に恵まれ、100歳の天寿を全うしたと伝えられています。

参考『宮古島庶民史』(1957)

野原集落では、この男をピギタリだとも伝えています。男が住んでいた敷跡には大御嶽が建てられ、ピギタリ世ヌ主と称した農業神が祀られています。また城跡の東側には次男知呂按司を祀った中御嶽、西側には三男金丸按司を祀った西御嶽があります。

うふ たき こう えん しょく ぶつ ぐん らく

大嶽公園の植物群落



この植物群落は、大嶽城址公園とその東側斜面に位置して
います。一定方向から吹き付ける風の影響で植物が高く生育
しづらい環境にあり、海岸にある崖でよく見られる風衝景観
が広がります。群落内では、ヤブニッケイ、バクチノキ、ナ
ンテンカズラをはじめ、様々な植物が
生育しています。また、数多くの陸産
貝類の固有種や貴重種が確認されてい
ます。



の ばる だけ たま いし

野原岳の靈石



この靈石は、大嶽按司が城の守護神として造ったと伝わります。沖縄には石に靈が宿るという信仰があり、地元ではここを「タマザラ御嶽」と呼びます。もともと城があったとされる山頂にありましたが、戦後、米軍施設建設時に現在の場所に移されました。底面の直径134cm、上面の直径110cm、高さ135cmで、硬い琉球石灰岩を美しい円錐台に仕上げており、当時の石工技術を見てとれます。



のばる 野原のマストリヤー



のばる
野原のマストリヤーは、旧暦8月15日に行われる豊年祭です。マストリヤーの起源については不明ですが、当時の過酷な人頭税を完納できた喜びや、翌年の豊年を予祝する気持ちなど、様々な想いから創りだされたという説があります。

月明かりの中、威勢よい掛け声にあわせ棒を振る男性の後を、ゆっくり厳粛に歌い踊る女性が続く様子は、宮古諸島の芸能の中でも独特です。



満月の下のマストリヤー

きゅうれき じゅうく やー い
旧暦8月15日は「十五夜」と言わ
れ、中秋の名月にあたります。月明
かりの下、4つのマスマトウ^{*}ごとに
公民館に集まり、マストリヤーが始
まります。

*マスマトウ：貢租を集めていた場所

マストリヤー
析取屋

年貢の粟を
計っていた
木村

男性
はだし

女性
黒絣

金正鼓の
リズムに
あわせて

7:00 ラン御嶽と公民館に
ツカサがお供えとおめり
夕方 各家庭でお月見
20:30頃 各マスマトウ(木村)で宴会



21:30頃 公民館で踊りと宴会



宮古島のパントウ (野原のサティパライ)

ユネスコ無形文化遺産

2018(平成30)年11月29日登録

来訪神：仮面・仮装の神々



野原のサティパライは、旧暦12月の最後の丑の日に行われる厄祓いの祭祀です。サティは里、パライは祓いで「里の厄祓い」を意味します。女性と子どもたちのみの行事で、夕方になるとパントウの面を付けた少年を先頭にして集落を練り歩き、悪霊を追い祓います。

野原のサティパライは、島尻のパートウとともに2018(平成30)年、ユネスコ無形文化遺産に登録されました。



サティパライ=里祓い

パントウとは、怪物や化け物を表す言葉ですが、祭祀に登場することで、厄祓いと豊穣を予祝する来訪神になります。

野原のパントウの面がいつ、どのようにもたらされたかは、はっきりしていません。



みや こ じょう ふ

宮古上布



写真：宮古上布保持団体

みや こ じょう ふ ちよ ま げんりょう あさ おり もの て う いと
宮古上布は苧麻を原料とする麻織物です。手績みによる糸
かすりくく そ お きぬたう し あ か こう
つくり、紡括り、染め、織り、砧打ち(仕上げ加工)など、それ
こ う てい ぶんぎょうせい おこな て さぎょう せい き まつ
ぞの工程を分業制で行い、すべて手作業です。16世紀末に
す がま ゆん ちゅ つと しん えい つま いな いし あや さび ふ おう
洲鎌与人を務めた真栄の妻の稻石が、織り上げた綾鑄布を王
ふ けんじょう はじ かん
府に献上したことが宮古上布の始まりとされます。1637(寛
えい にんとうぜい こうのう ふ さだ ぎ じゅつ はつたつ
永14)年に始まった人頭税で貢納布に定められ、技術が発達し
めい じ はい し ご じ ゆう せいい さん
ていきました。1903(明治36)年、人頭税廃止後の自由生産に
しゅ さんぎょう はってん いま けいしよう
より島の主産業として発展し、今に継承されています。

ちよ ま いと て う

苧麻糸手績み



写真：宮古苧麻績み保存会

か ちよ ま げんりょう
くに じゅうよう む けい ぶん
イラクサ科の苧麻を原料とする苧麻糸は、国の重要無形文
か ざい みや こ じょう ふ ざいりょう しょくぶつ せん い よ つな
化財である宮古上布の材料です。植物の纖維を撚り繋いで糸
つく う い
を作ることを「績む」と言い、苧麻糸手績みは苧麻の纖維を
て わざ ぶー が ぶー さ ぶー ん よ か
績む手技です。苧麻刈り、苧麻裂き、苧麻績み、撚り掛け、
かし こう てい
経木掛けの5つの工程からなり、苧麻の茎の表皮から纖維を
と ほそ なが
取って細く裂き、手で績んで長い糸を作ります。この手技は
ほ ぞん でんしょう か
宮古上布の保存と伝承に欠かせない技術であり、宮古苧麻績
こう けい しや いく せい と く
み保存会による後継者育成が取り組まれています。